

振袖

近頃、私は古物商の多く住んで居る小さい町を通つて居る間に、一軒の店にかかつて居る派手な紫の振袖を見た。徳川時代に位の高い貴婦人が着たやうな着物であつた。私はそれについて居る五つの紋所を見るために足を停めた、同時に昔江戸の破滅の原因となつたと云はれる同じ着物のつぎの傳説を憶ひ出した。

殆んど二百五十年前、將軍の都の或富んだ商人の娘が、どこかの祭禮で、著しく美麗な若い侍を群集のうちに認めて、直ちに戀に落ちた。彼女に取つては不幸にも、彼女の従者によつてその侍の何人であるか、どこの人であらうかを知る事ができないうちに、彼は雑沓の間に見えなくなつた。しかし彼の印象ははつきりと、——着物の最も些細な點まで、——彼女の記憶に残つた。その當時若い侍の着た晴着は若い女の着物と同じ程派手であつた、そしてこの立派な侍の上着は戀に悩んだ少女に取つては非常に綺麗に見えた。彼女は同じ紋をつけた同じ色と地の着物を着たら何かの折に彼の注意を惹く事もできようと想像した。

そこで彼女は當時の習慣によつて大層長い袖のこんな着物を作らせた、そしてそれを非常に大

切にした。外出の度毎にそれを着た、そして家ではそれを部屋にかけて、彼女の知らない愛人の姿がその中に潜んで居る事を想像して見ようとした。どうかすると何時間でも、その前で——或は物思ひをしたり或は泣いたりして——すごす事もあつた。彼女は又この青年の愛を得るために神佛に祈つて——日蓮宗の題目『南無妙法蓮華經』をよく唱へた。

しかし彼女は再び青年を見なかつた、それで彼女は彼を慕うて煩つた、病氣になつて、死んで葬られた。葬られてから、そんなに彼女が大事にしてゐた振袖は檀那寺へ寄贈された。死んだ人の着物をこんな風に處分するのは古い習慣である。

住職はその着物を高く賣る事ができた。それは高價な絹で、その上に落ちた涙の痕は残つてゐなかつた。それを買ったのは死んだ婦人と殆んど同年の少女であつた。彼女はただ一日だけそれを着た。それから病氣になつて、妙な素振をするやうになつた——綺麗な青年が目について仕方がない、そのために自分は死ぬのだと叫び出した。それから暫くして彼女は死んだ。それから振袖は再び寺へ寄贈された。

又住職はそれを賣つた、それから又それが若い婦人の物となつて、その婦人は一度だけそれを着た。それから又彼女は病氣になつて、綺麗なまぼろしの事を口走つて、死んで、葬られた。それから着物は三度目に寺へ寄附された、そこで住職は驚いて訝つた。

それにも拘らず彼はもう一度その不吉な着物を賣つて見た。もう一度或少女がそれを求めて、もう一度それを着た、そしてそれを着た少女は煩つて死んだ。そして着物は四度目に寺へ寄附さ

れた。そこで住職は何か悪い力がそのうちに籠つて居ると信じた。それで彼は小僧達に、寺の庭で火を焚いてその着物を焼く事を命じた。

そこで、彼等は火を焚いて、その中へ着物を投じた。ところがその絹が燃え出すと、突然その上に火焰の目映まばゆいやうな文字——『南無妙法蓮華經』の題目——が現れた、——そしてこれが一つ一つ、大きな火花のやうになつて寺の屋根へ飛んだ、そして寺は焼けた。

燃える寺からの燃殻がやがて近所の方々の屋根に落ちた、それですぐ町が全部燃えた。その時、海の風が起つてその破滅を遠くの町々へ吹き送つた。それで區から區へ、殆んど江戸の全部が消滅した。そして明暦元年（一六五五）正月十八日に起つたこの火災は今でも東京では振袖火事として覚えられて居る。

集 雲 八 泉 小

『紀文大盡』と云ふ話の本によれば、振袖を作つた少女の名は『おさめ』であつた、そして彼女は麻布百姓町の酒屋、彦右衛門の娘であつた。綺麗であつたので、彼女は又麻布小町と呼ばれた。同じ書物によれば、その傳説の寺は、本郷の本妙寺と云ふ日蓮宗の寺であつた。それから着物の紋は桔梗であつた。しかしこの話には、色々違つた説がある、私は『紀文大盡』は信じない、何故なれば、それには、その綺麗な侍は實は人間ではなく、上野、不忍池に長く棲んでゐた龍の化身であると説いて居るからである。

(田部隆次譯)

Furisode. (In Ghostly Japan.)